

**<学会記録II>26. 2根管ならびに過剰歯根を有する  
犬歯の1例(東日本歯学会第21回学術大会一般講演抄  
録)**

著者名(日)	藤井 茂仁, 細川 洋一郎, 金子 昌幸, 松嶋 宏篤, 矢嶋 俊彦
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	22
号	1
ページ	108
発行年	2003-06-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00008817/">http://id.nii.ac.jp/1145/00008817/</a>

のskeletal ClassIIIを示したものと考えられた。今後は咬合管理を行い、成長終了後外科的矯正治療を適用する予定である。

## 26. 2 根管ならびに過剰歯根を有する犬歯の 1 例

○藤井 茂仁\*\*\*\*, 細川洋一郎\*\*, 金子 昌幸\*\*, 松嶋 宏篤\*\*, 矢嶋 俊彦\*\*  
(\*医療法人ルミエール歯科, \*\*北海道医療大学歯学部歯科放射線学講座,  
\*\*\*北海道医療大学歯学部口腔解剖学第一講座)

**【目的】**一般開業医において根管治療は日常的に行われており、歯の根管数および根数の確認は重要である。一般に、上顎第一大臼歯の近心頬側根、および下顎第一大臼歯の遠心根が高頻度で2根管性であることは広く認識されており、日常臨床において、見落とされることは少ない。しかし、2根管および過剰根を有する犬歯は、その認識が低いので、処置後、症状が軽快せず再度治療となる可能性も高いと考えられる。今回、2根管で2根を有する下顎右側犬歯の1症例を経験したので、文献的考察を加えて報告する。

**【症例】**58歳、女性。う蝕治療のためルミエール歯科を平成14年8月に受診した。下顎右側犬歯はCR充填が施されていたが、口腔内からの概観に異常はみられなかった。この下顎右側犬歯に自発痛を生じたため、急性歯髄炎の診断のもと、浸潤麻酔下で、抜髄処置を行った。翌日、臨床症状が特に認められなかったため、ガッタパー

チャーポイント+エンドシーラーの側方加圧にて根管充填を行い、X線写真を撮影した。X線診査の結果、根管充填をした根の舌側に、さらに他の1根を確認した。再度、臨床的に根管を探索した結果、根充した根に比べ、唇舌的に圧平された、より小さい根管口が舌側に認められた。根管拡大後、追加の根管充填処置を行い、X線撮影で確認を行った。その後、特に臨床症状を認めず、メタルコア装着後、前装鑄造冠の装着を行った。本症例は、現在特に不快症状の発現もなく、良好に経過している。

**【考察】**犬歯は歯根形態も単純で長く、変異も少ないと考えられている。しかし、過去の報告によると、2根性の犬歯は0.3%程度存在する。また、2根管性の犬歯は6-28%程度で報告がみられる。発生頻度は低いが、犬歯においても過剰根、2根管をもつ可能性を考慮にいれ、治療することが重要であると思われた。

## 27. 12年間放置された上顎骨陳旧性骨折

—併発していた上顎洞炎が、骨折治療後に自然治癒した1例—

○飯沼 英人\*\*\*, 田中 力延\*\*, 佐野 友昭\*\*, 大西 隆\*\*, 細川洋一郎\*\*, 金子 昌幸\*\*  
(\*自衛隊札幌病院診療科歯科・\*\*北海道医療大学歯学部歯科放射線学講座)

今回われわれは、骨折後自覚症状が認められずに12年間経過した、上顎洞炎を伴う上顎骨陳旧性骨折の症例を経験したので、若干の考察を加えて報告する。

**【症例】**34歳、男性

**【主訴】**22および23相当根尖部から鼻翼にわたる腫脹と疼痛

**【既往歴】**1988年5月6日、相撲大会にて顔面を打撲し、耳鼻咽喉科にて鼻骨骨折の診断のもと、応急処置を受けるもその後放置。約数週間顔面の腫脹が認められたが、自然に消退した。

**【現病歴】**2001年6月以降、前歯部の腫脹と出血を伴な

う激痛を自覚するも、近医歯科にて内服薬を処方され症状は消失。2001年11月、近医歯科にて、13の歯内療法中に22および23根尖部から鼻翼にかけて腫脹と疼痛が出現したため、11月19日、自衛隊札幌病院診療科歯科を受診。

**【現症】**14~24部にかけて手指にて歯牙を動揺させると、歯槽突起部から一部上顎骨を含めて一塊として動揺し、疼痛と13~23部歯肉溝からの排膿を認めた。CT検査にて、左側上顎洞内に炎症を疑わせる所見が認められた。

**【処置ならびに経過】**2001年12月10日、全身麻酔下にて、観血的整復固定術、上顎形成術、骨片間異物除去術、12・13・23抜歯術を施行。12月28日、軽快退院。その後2002